

# 算命学中庸

## 【初年】 5 3 回目

5 3 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【大運法】 ①

・【初年】 5 3 回目【大運法①】 01

### □ 大運法 ① (たいうんほう)

大運法は 500 年ほど前につくられたとされています。  
技法としては比較的新しいと考えられています。  
それでも約 500 年の歴史があります。

### 大運法の成立

人間が共同生活を <sup>いとな</sup>営む際には、人間関係および社会的  
<sup>かんきょう</sup>環境が影響します。

家族、仲間、会社、職業、地域、あるいは共通の政治理念をもった政党、国家、そして時代背景などがあります。

そのなかで最も身近で、最も影響を与える人間関係は親・兄弟・配偶者・子供など、家族だと思えます。

社会的環境は、職業、地域、政党、国家、時代的背景などです。

地域としては、都会、あるいは田舎といわれる農村や漁村になります。

時代的背景は〔動乱の時代〕と〔平和の時代〕に分けられます。

算命学は、人間が此の<sup>こ</sup>の<sup>よ</sup>世に誕生すると、宿命が与えられて、役目が与えられると考えています。

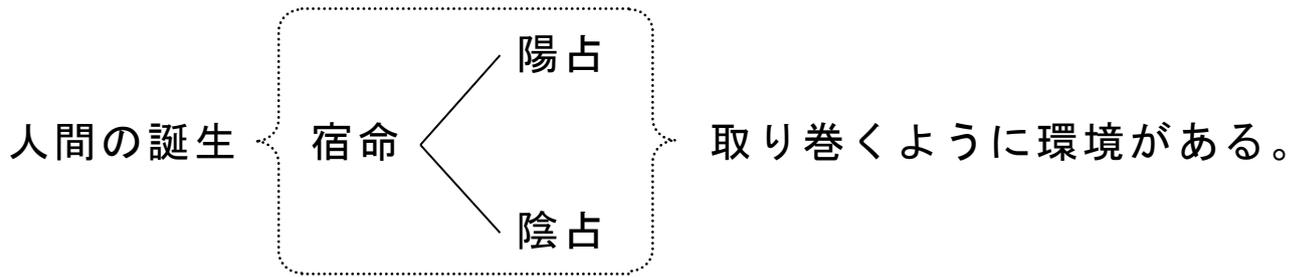
その宿命に多大な影響を与えるのが、人間関係と社会的環境といえるでしょう。

宿命は時代と環境に左右されると考えています。

宿命はなにかといえば、「陽占（人体図）」と「陰占」という宿命を意味します。

宿命を取り巻くように環境があります。

宿命（1）陽占・陰占



環境というのは、いろいろと範囲は広いのですが、おなじ宿命にとっては、つまり、おなじ「生年月日」に生まれた人物にとって、どのような環境が与えられるのか——それは人それぞれです。

〔たとえば〕 1本の樹木があったとします。

樹木の宿命 — 1年のなかには四季おりおりの環境がある。

植えられた場所によっても環境は異なる。

樹木には、一年というなかにおいて、四季おりおりの環境が巡<sup>めぐ</sup>ってきます。

おなじ種類の樹木でも、植えられた場所によって異なる環境が与えられます。樹木に与えられた宿命です。その宿命を人間でいえば、産まれた家庭ということになります。

どの種類の樹木なのか……これも宿命です。

人間でいえば、男に生まれたのか、女に生まれたのかは宿命です。

樹木の環境は、日当たりがよいとか、悪いとか、湿気が多い少ないとか、当然「春夏秋冬」の季節も、樹木の環境だと考えますと、その環境は樹木に多大な影響がおよぼすこととなります。

人間でいえば……裕福な家庭に産まれたのか、貧しい家庭に産まれたのか、やさしい両親のもとで育まれたのか、そうではない両親に養われたのか、その環境は子供が育つ過程において多大な影響を与えます。

紅葉であれば、春になると発芽し、枝葉が繁茂して夏を迎え、秋には紅を彩り、冬には落葉にいたりします。

樹木は自然の環境のなかにあつて、そこに巡り来る途を自ら切り拓くことはできません。

ただただ春夏秋冬の変わりゆく環境を受け入れるだけの運命になります。

それとおなじように、人間も生きる環境に影響されます。しかし、人間は自らの意志で命を運ぶことができます。それを運命とっています。

人間にとっての環境といえは、先ほどもうしあげましたように、家庭というなかにおいて、両親の話もありますし、住む地域・場所の話もあります。

日本のなかでも、東京の都心に住む人、北海道に住む人、沖縄に住む人では、自然環境が異なります。

あるいは、どこかの地域に地震などの災害が起こると、その地域に住む人達は被害に遭うことになります。おなじ生年月日に生まれた人でも、どの国、どのような場所に住むのかによって、まわりの環境から受ける影響はまったく異なる状況になってしまいます。

☞ 樹木と極めて大きく異なるのは、人間は知能をもち、精神性を備え、自由に動くことができる肉体をもっています。知能・精神のはたらき、肉体をつかうことで自分の運命を切り拓くことができるわけです。

個々の人物を取り巻く環境ということを考えますと、社会情勢が中東のように「動乱」であるとか、戦乱のない「平和」であるとか、このことは大きく影響します。個人でいえば人間関係、家庭環境・職場における事象などは、とうぜん個人の宿命に影響をあたえます。

⇒ 環境が宿命に影響を与えるということでは、不安定な社会情勢、動乱どうらんの状況のなかで活躍する人も出てきます。それまで冴さえなかったのに、災害などに遭あってから、急に元気になる人物もおられます。

あるいは、今まで元気であった人が、災害に遭ったことで、元気・生きる気力を失ってしまうということも起こります。

このように、個々の宿命に与えられる環境によって、実際に宿命が元気をなくしたり、元気づいたりということが起こってくるわけです。

⇒ これからの勉強で「先天運せんてんうん」あるいは「後天運こうてんうん」という言葉がでてきます。

先天運というのは「宿命」のことです。

後天運というのは「運勢」のことです。

先天運は「宿命」のこと。

後天運は「運勢」のこと。

後天運は大きく分けて、[年・月・日・大運]の4つがあります。つまり、運勢うんせいは大きく分けて4つあるということになります。

ねん うんせい  
年の運勢をみるものを「年運<sup>ねんうん</sup>」といいます。

毎月、毎月の運をみるものを「月運<sup>つきうん</sup>」といいます。

毎日、毎日の運をみるものを「日運<sup>にちうん</sup>」といいます。

10年間の運をみるものを「大運<sup>たいうん</sup>」といいます。

＊ ねん  
年の運勢を観る「年運」

＊ 毎月、毎月の運勢を観る「月運」

＊ 毎日、毎日の運勢を観る「日運」

＊ 10年間の運勢を観る「大運」

〔たとえば〕2019（令和1年）の干支<sup>かんし</sup>は「己亥<sup>き い</sup>」です。

「己土<sup>き ど</sup>の亥水<sup>い すい</sup>」の年<sup>とし</sup>です。

これはどなたにも共通した「干支」です。

地球上に生きている人は誰にでも、2019年（日本では令和1年）とありますが、この1年間は、「己亥<sup>きどのいすい</sup>」という名称の『気』が宇宙を流動しています。

地球上で生きている全ての人に、「己亥」という運勢が与えられています。

ねん つき ひ  
年／月／日の運勢が、どのように各人に影響を与えるのか、それは宿命によって違いますが、年／月／日の運勢は誰にでも共通して与えられて来るものです。

これからの勉強は「大運 たいうん」についてです。

大運も各人で異なります。1人ひとり違います。

「大運」は10年運ねんうんのことをいいます。

それゆえ、大運では10年間の運勢を観ていきます。

「年運」ねんうん その年の1年間です。

「月運」げつうん 1ヶ月です。

「日運」にちうん 1日です。

- ＊ 年運〔その年の1年間〕
- ＊ 月運〔1ヶ月〕
- ＊ 日運〔1日〕
- ＊ 大運〔10年運〕 10年間の運勢をみる

この4つの運勢を観るなかで、算命学が重要視するのは「年運」と「大運」です。

運勢のなかで重要視するのは「年運」と「大運」です。

それはどうしてなのかといえは……時間の長さゆらいに由来しています。

1日や1カ月は時間の期間が短いので〔影響の度合いは少ない〕と考えています。

☞ これは運勢の話ではないのですが……。

〔たとえば〕の話として、つぎのようなことがいえるでしょう。

今日1日、忙しく仕事をしたので、身体がものすごく疲れました。

でもそれは2～3日休めば回復します。

あるいは、この1ヶ月間とても忙しかったのであれば、それなりの時間はかかりますけど回復できます。

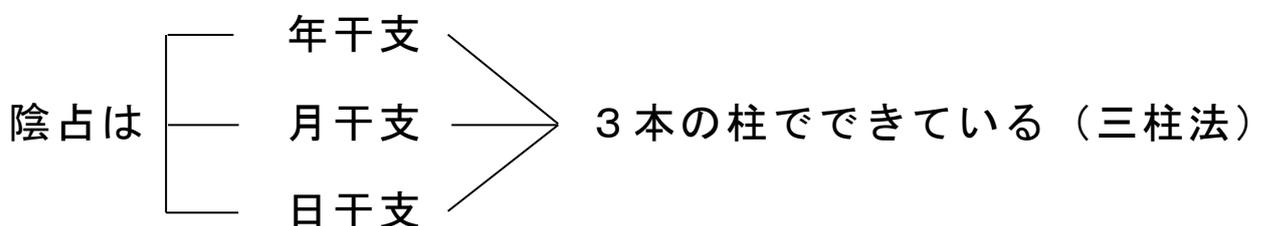
しかし、1年間のあいだ、忙しく身体を酷使したとなると、時間が長期間のために、なかなか身体の回復が進まない。ということが起こります。

そして、疲労が抜けたとおもっても、後日、その疲労の影響が出てきて、病気になるとか、なにか<sup>からだ</sup>身に不調がでて来ることもあるわけです。

このような意味合いで、年連と大連を重要視します。

「陰占」は「年干支」「月干支」「日干支」で連関しています。

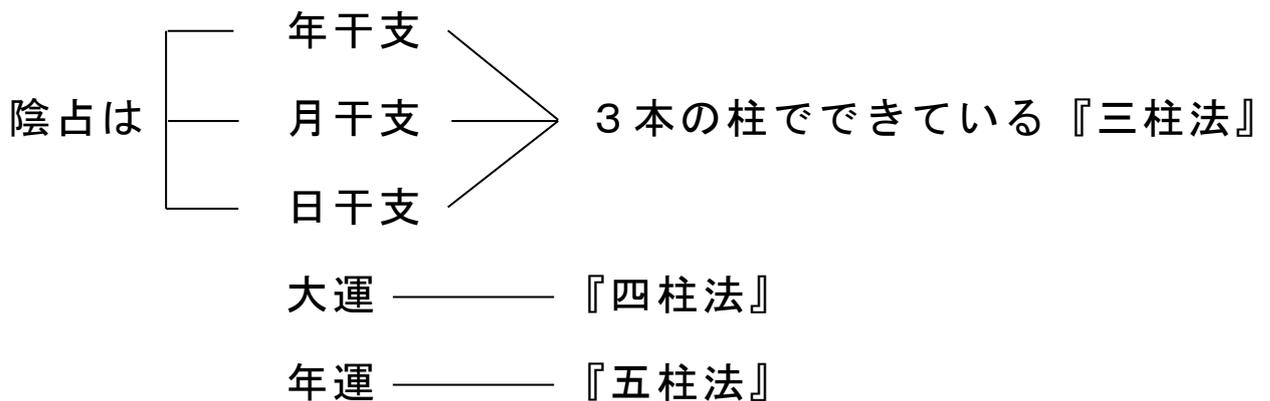
**宿命（2）三柱法**



「年干支」「月干支」「日干支」のそれぞれを1本の柱に見立てて、3本の柱で出来ていますから『三柱法』<sup>さんちゅうほう</sup>といえます。宿命を観る技法の1つです。

三柱法は宿命を見る技法ですが、宿命を10年単位で大きく観るときには、もう1つ「大運」があります。三柱法に大運を加えて、宿命を観る技法を『四柱法』<sup>よんちゅうほう</sup>といえます。

#### 宿命（3）五柱法



もう1つ「年運」を加えると『五柱法』<sup>ごちゅうほう</sup>といいますが、これらの技法をつかって運勢を観ていきます。

運勢の観方はおなじですけど、それぞれに意味合いは異なります。『五柱法』をつかうことが多いです。

『五柱法』で細かく観てゆくことになります

10年間の「大運」<sup>たいうん</sup>で大きく運勢の流れを観ます。そして、年の運勢を観ることが多いです。

⇒ 10年毎の運勢を観ていく「大運法」という技法がなぜできたのか——ご説明します。

大運は「10年毎の運勢を観てゆくもの」といいましたが、大運の運勢を知る目的は、未来・将来を見据えることにあります。

「大運」のうごき知る目的は、未来・将来を見ることです。10年毎に自分の未来がどのように変化して行くのかを見ます。どのように移り変わって行くのかを見るものです。

自分の将来、未来が10年単位で、どのように変化していくのかを見る技法です。

これを<sup>せんぼう</sup>占法に取り入れたとき——、

「自分の未来は、どちらの方向なのか……？」

「自分はどの方向に行けば安全なのか……？」

このことを予測・想定するための〔人生の道標になる〕と考えたのかも知れません。

算命学の占いでは、十二支盤には五方向が配置されています。東西南北の四方向に“中央”を加えています。

東西南北の方向に分ける、つまり縦と横に分けるという考え方は、古代中国においての算命術家が「じゅうおうか縦横家」と呼称された理由でもあるのです。

「人間はどの方向に行けば安全なのか……？」

「人間の未来と将来をあらわ現す方向はどこなのか……？」と考察したことに起因しますが、それを当時のけんじゃ賢者たちが、宇宙という自然にあ当ては嵌めたのです。

そうしますと、地球は太陽の周りをまわっています。太陽の周りをグルグルまわっていますが、その状態はまるで太陽を目指してまわっているかのようである。と考えたそうです。

太陽は東からのぼ昇り、南中で頂点に達します。

そして……西へとぼっ没していきます。

太陽は毎日、南を目指して、東から昇って来ることになります。

太陽も一箇所に停止しているわけではありません。

どこかへの方向を目指してうごいています。

地球は太陽の周りをまわっていますけど、その太陽はさらにどちらかの方向へとうごいているわけです。

当時の賢者<sup>けんじゃ</sup>たちは、地球上に住んでいる人間、植物も動物もすべてのものは、太陽がうごく方向を目指していると考えたのです。

## ① 未来

未来というのは、太陽の動く<sup>ほうこう</sup>方向である——という考え方をして、その考えが基本になっています。

その太陽の動きは、どこへ向かっているかということ、南へ向かってうごいています。

どうして——南の方角なのかということになりますが、地球上で考えると、太陽は東から昇って、天の南を通ります。

このことを「南中<sup>なんちゅう</sup>する」といいますが、そして太陽は西の方角へ沈んでいきます。

賢者たちは、太陽が南中するのは、太陽が目指しているのは南だ。という考えをもつに至ったわけです。

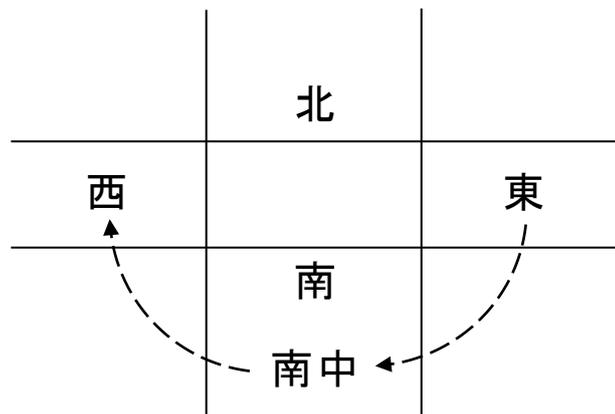
それゆえ、南が未来の<sup>ほうこう</sup>方向であるとしたのです。

参考：方向〔向いたり、進んだりする方〕

参考：方角〔進んでいる方向。進路〕

☞ その姿を人体図に当てはめると、宿命（4）南中 のようになります。

宿命（4）南中



太陽は南を目指している

## ② 陰占の世界

ここでは「<sup>いんせん</sup>陰占」の宿命です。

陰占のなかでは、どこが1番に太陽の影響を受けているのかと考えました。

陰占の宿命は「年干支」「月干支」「日干支」の<sup>さんちゆう</sup>三柱で成り立っています。

宿命（5）年・月・日

① 日 ② 月 ③ 年  
干 干 干  
支 支 支

三柱は ③ 年 ② 月 ① 日 です。

<sup>ねん</sup>年・<sup>つき</sup>月・<sup>ひ</sup>日をあらわしたときに、この3つのなかで、太陽にもっとも関わり合いの深いのは、どれなのかということになったのです。

☞ 「日干支の1日」という<sup>いちにち</sup>単位は、太陽の動きを表しているわけではないのです。

太陽の位置そのものを意味していません。

1日という単位は〔地球が1<sup>いちじてん</sup>自転〕することを表しているわけです。

つまり「日干支」は地球が1自転することを意味しています。

「日干支」は太陽の位置をあらわしていません。

(地球が1自転することをあらわしている)

### ☞ <sup>ねん</sup>年という単位

これも太陽のうごきに、直接影響されているわけではありません。

地球は太陽のまわりを周期的に回っていますけど——

<sup>ねん</sup>年という単位は、太陽の周りを、地球が1<sup>こうてん</sup>公転することを表しているわけです。

つまり「年干支」は地球が1公転することを意味しています。

「年干支」は太陽に直接影響されていません。地球が太陽のまわりを1公転することをあらわしているのです。

参考：公転〔自分より大きなほかの天体の周囲を、一定の周期で回ること〕

〔惑星・衛星・恒星などが、それぞれ太陽・惑星・ほかの恒星などのまわりを周期的に回る運動〕

「月は地球のまわりを公転し、地球は太陽のまわりを公転する」

## ☞ <sup>つき</sup>月という単位

月という単位は、太陽と直結しています。

〔たとえば〕（<sup>うま</sup>午の<sup>つき</sup>月）といえ、十二支盤上においては、（午）の位置に太陽がいる。ということであらわしているわけです。

それゆえ「<sup>げっかんし</sup>月干支」の（<sup>つき</sup>月）という単位は——太陽に直結しています。

月干支（月という単位は、太陽に直結している）

12月になると（子）の方向に太陽が位置します。

6月になると（午）の方向に太陽が位置していることをあらわしていますから、太陽に最も関わりが深いのは（<sup>つき</sup>月）だと考えたわけです。

このことを「陰占」で考えます。

太陽と最も密接な関係があるのは「<sup>げっかんし</sup>月干支」です。

（<sup>げっし</sup>月支）は十二支盤上で太陽の位置する場所をあらわしています。

それゆえ（午）の位置を南として、火性の位置としたのです。

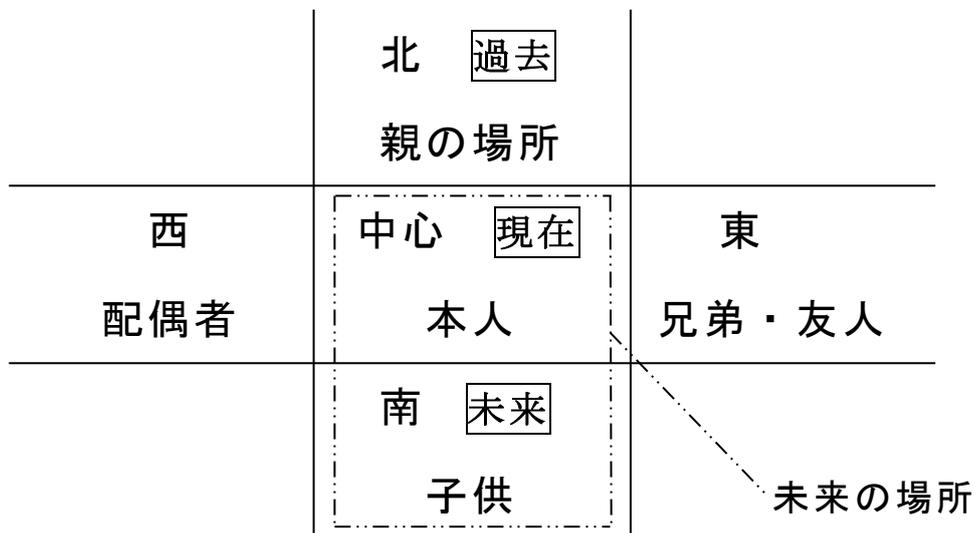
### ③ 陽占の世界

これらのことを陽占（人体図）で考えますと、人体図には五方向があります。

その五方向の場所には“人物”を配置できます。

陰占の考えとは別に、陽占は **過去の場所** **現在の場所** **未来の場所** が決まっています。

**宿命（6）陽占（人体図）**



北は親の場所です。

親の場所は何をあらわしているのかといえば、それは親から さかのぼ 遡ると過去の人（先祖）です。

それゆえ、親の場所は過去の場所になります。

中心は本人の場所です。

人間はどなたでも、自分が中心で生きています。

自分が中心で存在しています。

現在、本人は生きている状態ですから、これは「現在」をあらわしています。

〔本人は現在である・自分は現在である〕

しかし、今の、この瞬間がもう未来になっています。

瞬時もおなじ空間にとどまっていません。

それゆえ、未来の場所とも考えています。

本人は未来に含まれるとしたのです。

自分の未来を託<sup>たく</sup>す人物は子供です。

子供は未来になります。

そこで——中央と子供の場所は未来の場所としました。

本人の場所と子供の場所は未来の場所になります。

**宿命（6）陽占（人体図）**において、未来の場所（子供の場所）

が出てくるのは、陰占の場合は「月干支」です。

陰占では「日干」から「月干」をみると、第二命星の子供の場所に十大主星がでてきます。

「日干」から（月支）の蔵干をみると、本人の場所である主星に十大主星がでてきます。

このように「月干支」は **未来の場所** だということです。

**宿命（6）陽占（人体図）** をみてわかるように、本人の場所と子供の場所は未来の場所になります。

☞ 「月干支」が未来の場所です。

陰占宿命で——「日干」から「月干」をみてください  
第二命星（子供の場所）に十大主星がでてきます。

陰占宿命で——「日干」から（月支）二十八元の蔵干をみると、人体図の主星に十大主星がでてきます。

🔍 21 頁の参考資料「人体図の場所と陰占」をみてください。

参考資料

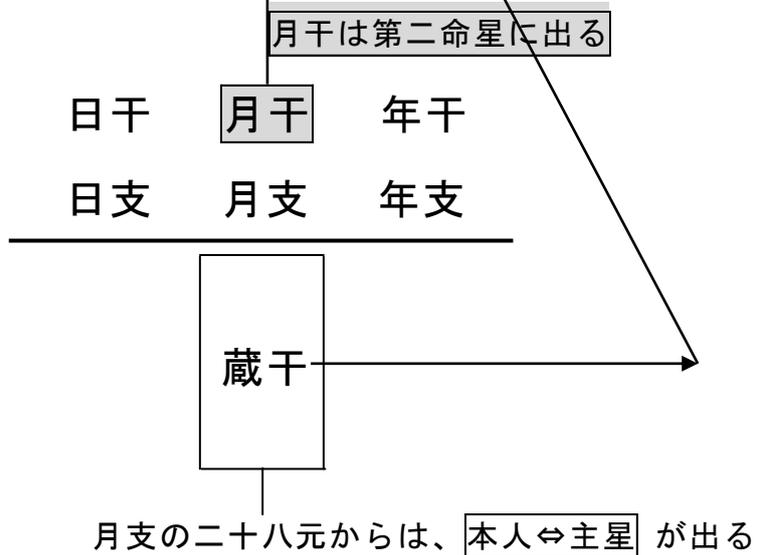
「人体図の場所と陰占」

『大運法①』

陽占（人体図）



陰占



つまり……。

(1) 太陽は必ず南中へ向かいますから、太陽の目指す方向は南だと考えました。

太陽の目指す方向は南、その太陽に従って動いている地球も、南の方向を目指していると考えたのです。

(2) そのことを陰占に照らし合わせると、太陽の動きと、最も関り合いの深いのは「月干支」になります

(3) 陽占（人体図）でそのことを考えますと、人体図の未来というのは、本人の場所と子供の場所です。

これらのことから、「月干支」は未来が始まる場所と考えているのです。

南へ行くと未来であり、究極は「死への方角」です。

算命学では、南へ行くと「死」が待っていることになります。

仏教では「南無<sup>なむ</sup>」というのは、南が無（死）と、解釈するようですが、中庸学ではそうは考えていません。

中庸学は「南無」というのは「悟られた方の法<sup>ほう</sup>に帰依<sup>きえ</sup>する」と解釈しています。

<sup>あみだぶつ</sup>  
阿弥陀仏「仏陀と呼ばれる悟られた人に帰依する」という  
意味になるのです。

<sup>なむ</sup>  
南無はインドの古代語で（ナーモ）といます。  
ナーモは「帰依する」という意味です。

<sup>あみ</sup>  
阿弥（アミー）と呼ばれる悟られた方に帰依する。  
という意味になります。

アミーは<sup>ぶつだ</sup>仏陀（お釈迦様）を意味します。

【初年】 5 3 回目【大運法①】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 5 4 回目【大運法②】です。